様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５月１０日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2008～2011
課題番号：20520211
研究課題名（和文）ウィリアム・ブレイクと柳宗悦に関する比較文学比較文化的研究

研究課題名（英文）A Study of William Blake and YANAGI Muneyoshi in Comparative Literature and Culture

研究代表者
佐藤　光　（SATO HIKARI）
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：80296011

研究成果の概要（和文）：
ウィリアム・ブレイクはインド哲学の影響下で、ゆるしのメカニズムを基調とする独自のキリスト教を打ち立てた。1914 年に柳宗悦が『キリアム・ブレーク』を出版し、ブレイクに「東洋」哲学に通じるものがあると記したのは牽強付会な見解ではなかった。
明治･大正期の日本においてブレイクが童謡詩人､象徴詩人として受容されたのに対し、柳は社会改革者としてのブレイクに注目した。柳のブレイク研究は夏目漱石より受け継いだ「自己本位」型のブレイク研究である。

研究成果の概要（英文）：
Inspired Upanishad philosophy in India, William Blake established his own version of Christianity based on the concept of mutual forgiveness. When YANAGI Muneyoshi published William Blake in 1914, he wrote that Blake had something in common with “Oriental” philosophy, which was not far-fetched comment at all but reasonable observation.
In Meiji and Taisho periods Blake was generally received as either a poet of nursery rhymes or a symbolist, but Yanagi focused on the aspect of a social reformer in Blake. Yanagi studied Blake by himself, without accepting the theories of British and American scholars of Blake uncritically, just as NATSUME Soseki, a former lecturer in the Imperial University of Tokyo and later well-known novelist, gave lectures on English literature on the basis of his own understanding of the text.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	800,000	240,000	1040,000
2009 年度	900,000	270,000	1170,000
2010 年度	900,000	270,000	1170,000
2011 年度	900,000	270,000	1170,000
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：英文学
科研費の分科・細目：2902
キーワード：英文学、比較文学、ブレイク、柳宗悦、イギリス

１．研究開始当初の背景
（１）ウィリアム・ブレイクと「東洋」研究に関する学術的背景

ブレイクが「東洋」の哲学的影響を受けたのではないか､という示唆は､1924 年に S. フォスター・デーモンが行っており、多くの研

究者がブレイク神話とヒンドゥー教神話との類似を指摘してきた（Saurat 1929, Frye 1947, Rudd 1956, Nanavutty 1957, Blunt 1959, Fisher 1961）。とくにキャスリン・レインが 1968 年に出版した *Blake and Tradition* はブレイク神話の起源を幅広く探索した大著であり、ブレイクが影響を受けたと考えられる文化的伝統として、聖書、ギリシア神話、ヒンドゥー教神話、チャールズ・ウィルキンズが 1785 年に英訳を出版した『バガヴァッド・ギータ』、同時代の「東洋」学者ウィリアム・ジョーンズのテクスト、仏教の教理、新プラトン主義思想、錬金術などが列挙されている。　レインの研究は広範囲に渡っており興味深いものであるが、いつ、どのようにしてブレイクがこれらの文化的伝統と接触したのか、という問題を実証的に検証する作業はなされていない。ブレイクのテクストとその哲学的、思想的内容が類似するテクストが並置されているだけであり、それがレインの研究の致命的な欠陥となっている。　レイン以後の研究では、ブレイクと関わりのあった出版業者であるジョゼフ・ジョンソンを通して、インド関連の文献をブレイクが読む機会があったのではないか、という前提で、Edward Moor, *The Hindu Pantheon*、Volney, *The Ruins; or, a Survey of the Revolutions of* Empires, Thomas Maurice, *The History of Hindostan* とブレイクのテクストとの関係が議論されている（Burke 1973, Paley 1983, Weir 2003）。さらに 1790 年代のブレイクに焦点を絞り、ブレイクは同時代のオリエンタリズムの影響を受けておらず、「東洋」に対する偏見を共有していなかったとする研究（Makdisi 2003）や、その反論として、1790 年代のブレイクのテクストには「東洋」に対する言及がほとんどないという議論がなされている（Larrissy 2005）。なお、2006 年に出版された論文集 *The Reception of Blake in the Orient* (London: Continuum, 2006) において、筆者は、1800 年以降のブレイクに注目し、ブレイクのパトロンであったウィリアム・ヘイリーを通じてインドに関する知識がブレイクに流れ込んでいた可能性を示唆した。

（２）ウィリアム・ブレイクと柳宗悦の比較文学比較文化的研究に関する学術的背景

柳についての代表的な研究としては、鶴見俊輔『柳宗悦』（1976）、阿満利麿『柳宗悦』（1987）、水尾比呂志『評伝柳宗悦』（1992）、中見真理『柳宗悦－時代と思想』（2003）が挙げられるが、民芸運動の創始者、宗教思想家としての側面が強調される傾向がある。柳とブレイクを扱った論考としては、久守和子「ブレイク受容史の一断面」（1977）、由良君美「柳思想の始発駅『ヰリアム・ブレーク』」（1981）、由良君美「柳宗悦研究資料柳のブレイク・ノート」（1981）、由良君美「柳宗悦とヰリアム・ブレイク」（1981）、紅野敏郎「柳宗悦のブレイク体験」（1983）が挙げられる。とくに、『柳宗悦全集第 5 巻』の月報に収録された由良君美「柳宗悦研究資料柳のブレイク・ノート」は、全集を編集する過程において発見された柳のノート類に基づいて、柳が『ヰリアム・ブレーク』（1914）を執筆したときに、「サンプスン校訂の、1913 年版『ブレイク詩集』第二版本」を使用したことを指摘している。由良はこの短い論考を、「今後、思想家柳の原稿・蔵書・断簡零墨が学問的に整理整頓されて、立派な和洋文による書誌として出版され、世界に開く柳思想の宝庫として後悔される必要があるだろう」と締めくくったが、その後、柳の著作と手紙が『全集』として公開されたものの、蔵書目録は未だに編纂されていない。柳とブレイクに関する研究は、その思想的類似は既に指摘されてはいるものの、柳がブレイクからどのような影響を具体的に受けたか、という点については十分な検証はなされていない。

２．研究の目的

本研究の目的は、インド、英国、日本という三つの異なる地域の間で生じた異文化交流の諸相を、具体的なテクストに基づき、比較文学の観点から考察することにある。研究対象として、18 世紀英国の詩人・画家・銅版画師であるウィリアム・ブレイクのテクストと、ブレイクの影響を強く受けた近代日本の思想家である柳宗悦のテクストを取りあげる。ブレイクは、伝統的なキリスト教のなかに異教（キリスト教以外の宗教）に対する排他性と攻撃性が存在することに注目し、寛容の精神に基づいた異教をも包摂しうる独自のキリスト教をブレイク神話として構築した。柳は、ブレイクの宗教思想から個性の尊重という哲学を引き出し、日韓併合の時代における朝鮮民族美術館の設立、国家総動員法の時代における琉球方言の保護、戦後のアメリカの強い文化的影響力に対して日本文化の独自性の擁護、というかたちでそれを実践した。本研究では、両者のテクストをそれぞれの歴史的文脈において分析し、その影響関係を実証的に探ることによって、異教がインドを出発点としてブレイクに受容されて多神教的なキリスト教を生み、さらに柳へ流れ込んで多文化共生の思想として結実するに至った過程を明らかにする。

３．研究の方法

ブレイクと「東洋」に関する先行研究、ブレイクとヘイリーに関する先行研究を総括した上で、調査の出発点をヘイリーの蔵書目録とする。ブレイクがヘイリーの屋敷を去ることを決断する 1803 年までに刊行されたインド関連の出版物のうち、この目録に掲載さ

れている文献を選び出し、ブレイクのテクストとの関係の有無を検討する。

本研究の第一段階のまとめとして、前年度に行った基礎資料とその検討結果に基づき、ブレイクが同時代の「東洋」の文献からどのような影響を受け、どのようにして独自の多神教的なキリスト教を構築したかを考察する。以下の 3 つの作業を予定している。第一に、ウィリアム・ジョーンズやトマス・モリスらがどのような観点からインドの文化、宗教等をキリスト教文化圏に紹介しようとしたか、という問題を設定する。彼らは、キリスト教中心主義の立場から、ヒンドゥー教を堕落した宗教とみなしたのか、それとも、世界に散在する多くの宗教のうちの一つとして異教を扱ったのか。もし、後者の立場をとったのであれば、ヨーロッパ啓蒙主義時代において、キリスト教文化圏では絶対的な真理の位置を、揺らぎながらもまだしっかりと保持していたキリスト教そのものとは、どのように折り合いをつけたのだろうか。この問題と取り組むためには、ジョーンズやモリスのテクストだけでは不十分であり、彼らの著作がロンドンでどのように受容されたのかを調べる必要がある。したがって、第二の作業として、18 世紀ロンドンで出版されていた文芸批評雑誌に掲載された書評記事のうち、インド関連の文献に関わるものを選び出しその内容を調査する。これらの雑誌が個々に政治的な偏向を備えていたことは既に周知の事実であるので、保守派の立場、革新派の立場を勘案した上で、同時代のインド関連の文献に対する受容の諸相を考察し、書評記事から逆照射するかたちで、ジョーンズやモリスのテクストがもつ歴史的意義を確定する。これらの作業を済ませた後、第三の作業として、ブレイクが独自のキリスト教を作り上げていく過程において、異教との接触がどのような意味を持ったのかを明らかにする。

本研究の第二段階は、ブレイクと柳の比較文学比較文化的研究であり、柳とブレイクに関する先行研究、柳の著書『キリアム・ブレーク』に関する先行研究を総括した上で、『キリアム・ブレーク』において柳がブレイクをどのように論じたのか、を考える。『キリアム・ブレーク』が刊行された 1914 年当時、ブレイクが英文学の学術的研究対象として考慮されていなかったことは、長与善郎の自伝的小説『わが心の遍歴』に叙述された主人公と東京帝国大学文学部長とのやりとりに象徴されるし、事実、欧米の英文学界において本格的なブレイク研究の端緒となったのは、Jacob Bronowski, *William Blake 1757-1827: A Man Without a Mask*（London: Secker & Warburg, 1944）である。ブレイクが研究対象として認知されていない時代に、あえてブレイク論を刊行した柳は、ブレイクのどのような点に関心を持ったのか。また、ブレイクを論じる上で、柳はどのような資料を参照したのか。柳が『キリアム・ブレーク』のなかで引用する参考文献（所謂ブレイク論に加えて、宗教、哲学、心理学、文学に関わる文献）の一覧を作成し、参考文献のとくにどの部分を柳が引用したのか、に注目して、柳のブレイクに対する態度の一端を、参考文献の取捨選択のなかから明らかにする。

４．研究成果

ウィリマム・ブレイクが 1800 年から 1803 年にかけて、ウィリアム・ヘイリーの庇護下にあったとき、ヘイリーの蔵書を通してインドの宗教や哲学に触れ、それらによってブレイクは、異教を包摂し、ゆるしを中心とする独自のキリスト教観を育んだ。当時の「東洋」学者であるウィリアム・ジョーンズやトマス・モリスによるヒンドゥー神話の新プラトン主義的解釈に誘発されて、ブレイクは「状態」と「個人」の哲学を着想し、ゆるしのメカニズムを作品中に書き込んだ、と考えられる。ブレイクのゆるしを基調とする「イエスの宗教」は、異教の教義から取り出された概念を基礎として構築されたのであり、キリスト教の用語を用いてはいるものの、結果として、非キリスト教文化圏に親和性を持つような独自の多神教的キリスト教に仕上がった。以上はロンドン大学に提出した PhD 論文 "William Blake and Multiculturalism: Between Christianity and Heathen Myths"の第 4 章で詳細に論じた。

従って、Ａ・Ｃ・スウィンバーンやアーサー・シモンズのような十九世紀末のブレイク研究者たちが、ブレイクには「東洋」思想に共通する部分がある、と指摘したのは正しかった。そして、柳が『キリアム・ブレーク』において、マックス・ミューラー訳『ウパニシャッド』を引きながら、「ブレークの思想が一見して東洋的色調をおびてゐる事は事實である」と記したのは、牽強付会な恣意的な解釈ではなく、極めて適切なブレイク理解だった。柳はブレイクに「東洋」思想を投影したのではない。ブレイクのテクストに埋まっていた「東洋」の哲学を、柳は正しく発見したのである。

柳のブレイク理解の特徴を明確にするために、明治・大正期においてブレイクがどのように受容されたのかを調査した。その結果、当初ブレイクは童謡詩人、象徴詩人として受容された後、山宮の訳詩集『ブレーク選集』（1922）が出版された頃から、社会派詩人としての側面に光が当たり始めたことがわかった。ブレイクを純粋で無垢な詩人とみなす理解は、三木露風や千家元麿に顕著に見ることができる（「ウィリアム・ブレイクから三木露風へ―『無垢と経験の歌』の変奏曲―」

と「千家元麿とウィリアム・ブレイク―無垢な『楽園の詩人』」)。また、18 世紀英国社会に対する充分な知識がなかったために、ブレイクが『経験の歌』に書き込んだ社会批判や偽善の告発に対する理解が遅れた(「なぜ『煙突』を訳さなかったのか―山宮允訳『ブレーク選集』と明治・大正期のブレイク理解」)。

柳のブレイク理解は、三木露風や千家元麿とは異なり、ブレイクを宗教詩人と捉えながらもその社会性に注目したところに特徴がある。明治・大正期のブレイク受容の実態を概観するために、寿岳文章と山宮允のブレイク研究を取り上げ、二人が別々に作成したブレイク書誌のデータを洗い直して年譜にまとめた上で、柳のブレイク研究が夏目漱石が唱えた「自己本位」型の英文学研究であることを指摘した(「明治・大正期のウィリアム・ブレイク書誌学者たち―柳宗悦、寿岳文章、山宮允」)。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
① 佐藤光、明治・大正期のウィリアム・ブレイク書誌学者たち―柳宗悦、寿岳文章、山宮允、超域文化科学紀要、査読無、16 号、2011、107-159
② 佐藤光、ウィリアム・ブレイクから三木露風へ―『無垢と経験の歌』の変奏曲―、比較文学、査読有、53 巻、2011、7-20
③ 佐藤光、なぜ「煙突」を訳さなかったのか―山宮允訳『ブレーク選集』と明治・大正期のブレイク理解、イギリス・ロマン派研究、査読有、35 号、2011、1-14
④ 佐藤光、エラズマス・ダーウィンとウィリアム・ブレイク再考、超域文化科学紀要、査読無、14 号、2009、5-18

〔学会発表〕（計５件）
① 佐藤光、ウィリアム・ブレイクと柳宗悦、日本詩人クラブ、2012 年 3 月 10 日、東京大学)、
② 佐藤光、Blake: "The Chimney Sweeper"―「無垢」と「経験」を考える、第 29 回イギリス・ロマン派講座、2010 年 6 月 19 日、早稲田大学)、
③ Hikari Sato, "A Digitally Disintegrated Reception of Blake?--The Case of 'Yameru Sobi' or 'The Sick Rose' by MIKI Rofu", Digital Romanticism: An International Conference, 2010 年 5 月 20 日-21 日, University of Tokyo)
④ Hikari Sato, "William Hayley and Natural History: Ballads Founded on anecdotes relating to animals (1805)", The 11th biennial International conference of the British Association for Romantic Studies: Romantic Circulations, 2009 年 7 月 23 日-26 日, Roehampton University, UK
⑤ 佐藤光、Erasmus Darwin, The Botanic Garden（1791）から William Blake へ、イギリス・ロマン派学会第 34 回全国大会シンポジアム、2008 年 10 月 11-12 日、四国大学

〔図書〕（計２件）
① 佐藤光、千家元麿とウィリアム・ブレイク―無垢な「楽園の詩人」、新見肇子・鈴木雅之編『揺るぎなき信念―イギリス・ロマン主義論集』、彩流社、2012、381-397
② Hikari Sato, "William Blake and Multiculturalism: Between Christianity and Heathen Myths", Ph.D. thesis, Birkbeck College, University of London, 2008, 1-301

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
佐藤　光（SATO HIKARI）
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：80296011

(2)研究分担者
なし　　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし　　（　　）

研究者番号：